

桑門秀我『選擇本願念佛集講義』現代語訳注——第十章——

上 野 忠 昭

【抄録】

明治期の浄土宗学者桑門秀我の著した『選擇本願念佛集講義』は、浄土宗鎮西流白旗派の伝統的な『選擇本願念佛集』解釈を知る手がかりとなる。本庄良文研究員と分担して進めている現代語訳及び注のうち、本稿は本書第十章を提示する。

本稿は、佛教大学法然仏教学研究センターの第一部門法然文献班第二班で本庄良文研究員とともに進めている桑門秀我『選擇本願念佛集講義』の現代語訳注作業の成果発表である。

キーワード…桑門秀我 選擇本願念佛集講義 選擇本願念佛集

化仏讃歎

第十章 化佛讃歎

【講義】先づ當章の來意を辨ぜば、凡そ修因ある所、感果順（したが）ふは理の當に然る（五五右）べき所なり。前章已に作業を明す。所謂る心行作業の修因具足せり。必ず感果あるべし。化佛讃歎は感果の初〔め〕なり。故に四修に次〔い〕で此〔の〕章來る。

まず、この章がなぜここ（第九章の次）に置かれたかを説明すると、因となる行を修すれば、それにしたがって果報を受けるのは理の当然である。前章ですでに作業について説明した。いわゆる、安心・起行・作業の修因を具備したので、必ずその報いとしての果報があるはずである。化仏讃歎は修した因に対して報いとして受ける結果の最初である。したがって、四修に続いてこの章がここに置かれ

るのである。

◎此の中三段。初〔め〕に篇目。

【本文】彌陀化佛來迎不讚歎^{シタマハ} 聞經之善^ノ 唯讚歎念佛之行^ヲ之文

◎この中に三段落ある。最初にこの章の標題。

【講義】此〔の〕章は、唯、觀經の下上の一品に就て、聞經と稱佛とを並べ舉〔げ〕て、化佛讚歎の有無を論ずる者にして、廣く一切の往生人に就て、唯、念佛のみ化讚あり、餘は都て無しと云〔ふ〕に非ず。『鈔』四〔四七〕〔に〕、

「問〔ふ〕。一切の往生、必ず化讚を感じるや〔耶〕。答

〔ふ〕。來迎は必ず有り。本願に由るが故に。佛讚は不定なり。機の別に由るが故に。又既に來迎有り。必ず應に讚を聞くべ〔應…再読〕し。文に無きは略なり〔也〕」〔取意。

「又」以下は第二義なり《也》又、聞經の時、三心具・不具の論あり。『糝鈔』四十七〔十四〕〔に〕、有人相傳各々具・不具の二義を成し、『大綱抄』は具の一義を成す。先輩、之を評して二義に通ずるを可と爲す。(五五左)

◎次に引文に二。初〔め〕に經文の中三。一に造惡の機を簡ぶ。

【本文】觀無量壽經云、或有衆生作衆惡業、雖不誹謗方等經典、如此愚人多造衆惡、無有慚愧。

【講義】「作衆惡業」とは、十惡業を作るを云〔ふ〕。○「雖不誹謗」等とは諸大乘經を方等經典と云ふ。『澤見』

この章は、ただ『觀無量壽經』の下品上生の一品について、聞經と稱仏とを並べ

挙げて、化仏讚歎の有無を論ずるのであって、廣く一切の往生人について、ただ念仏のみ化仏の讚歎があり、念仏の他はすべて化仏の讚歎がないと云うのではない。〔良忠〕『決疑鈔』四卷四七丁に「【問】質問する。一切の往生において、必ず化仏による讚歎をこうむるか。【答】答える。來迎は必ずある。本願に由るからである。仏が讚歎するかどうかは不定である。衆生の能力の度合いに由るからである。また、來迎は確かにあるから必ず讚歎する言葉を聞くにちがいない。經文に無いのは省略しているのである。」〔取意、〔また〕以下は第二の解釈である〕とある。また、聞經の時、三心を具足するか具足しないかの議論がある。〔聖問〕

『伝通記糝鈔』四十七卷十四丁には「人有りて相伝するに〔有人相伝〕」として、

おのおの具足する・具足しないという二つの解釈を挙げ、〔道光〕『選択大綱抄』は具足するという説を主張する。先輩はこれを評して、『伝通記糝鈔』の二つの

解釈に通じるという説をよしとする。

◎次に引用文に二つある。初めに『觀無量經』の文の中から三箇所。〔その〕第一は造惡の人をえらぶ。

「作衆惡業」とは十惡業を作ること云う。

○「雖不誹謗」等についていうと、諸大乘經を方等經典と云う。〔持阿〕『選択決

に云く、「方は謂く方廣、等は謂く平等、横に諸法に遍ず。故に方廣と名〔づ〕け、豎に凡聖を兼ね。故に平等と云ふ（也）。」

「不誹謗」に凡そ三類の不同あり。『頌義』二十九〔初左〕に云く。「上品中生は信じて（而）謗せず（不）。上品下生は聞〔き〕て謗せず（不）。下品上生は聞かば謗すべ（可）しと雖も、聞かざ（不）るに由るが故に、誹謗を生ぜず（不）。」

◎二に臨終の聞法を明す。

【本文】命欲終時、遇善知識爲讚^{ヘリノニスルニ} 大乘十二部經首題名字。以聞如是諸經名故、除却千劫極重惡業。智者復教合掌叉手稱^{タテマツテ}南無阿彌陀佛。稱^{スルガ}佛名故除五十億劫生死之罪。

【講義】「命欲終時」とは、此〔の〕機、臨終に獄火現ずるや否やに就〔い〕て異説あり。導師は現ずと云〔ふ〕。

（經文には下中品のみ獄火來現を明すと雖も、導師の意は下三品俱に惡相現ず。『般若讚』〔三一左〕に「地獄芬芬として眼前に現ず」と。是れ其〔の〕證なり。感師は『群疑論』六〔二八〕當品に「惡相無し」と云ふ。問師（『頌義』二十九〔八右〕）之を會して曰く、「文は中品に在〔り〕て（經文下中品獄火來現の文を指す）、而も上下を顯す（下上、下々兩品に獄火現すべき義を顯はす）三品俱に惡人なるが故に獄火皆な之〔れ〕有るべ（可）し。但し感師、下上品を判じて、惡相無しといふは（者）、且く經

疑鈔見聞」に、「方は方廣を謂い、等は平等を謂う。修行の段階を問わず（横）に、あらゆる存在（諸法）に行き渡るので方廣と名づけ、修行の段階を踏まえる（豎）と、凡夫と聖者を兼ねるので平等と云う。」とある。「不誹謗」に三種類ある。〔聖阿〕『釈淨土二藏義』二十九卷一丁左に「上品中生は信じて非難しない。上品下生は聞いても非難しない。下品上生は聞いたならば非難するにちがいないが聞かないので非難を生じない。」とある。

◎『觀無量壽經』の文の第二は、臨終の聞法を説明する。

【本文】觀無量壽經の文の第二は、臨終の聞法を説明する。以聞如是諸經名故、除却千劫極重惡業。智者復教合掌叉手稱^{タテマツテ}南無阿彌陀佛。稱^{スルガ}佛名故除五十億劫生死之罪。

「命欲終時」についていうと、この人の臨終に、地獄の炎が現れるかどうかについて異なる見解がある。善導は現れると云う。〔『觀無量壽經』〕には下中品のみ地獄の炎が現れることを明しているが、善導は下品上中下三生ともに惡相が現れると説く。〔善導〕『般若讚』三二丁左に「地獄は惡臭を放つて眼前に現れる」とあるのは、その証拠である。懷感禪師は『群疑論』六卷二八丁にこの品（下品上生）には「惡相はない」と云う。聖阿師は、〔『釈淨土二藏義』〕二十九卷八丁右においてこれを會通して、「文は下品中生にあつて〔『觀無量壽經』〕の下品中生にある「地獄衆火一時俱至」の文を指す）、しかも下品上生・下品下生を表す（下品上生、下品下生の兩品に獄火現するはずであるという解釈を明らかにしている）三品ともに惡人であるから、地獄の火は皆あるはずである。但し懷感禪師が、下品上生について解釈して、惡相が無いとするのは、まずは經文に従つて滅

文に順じて滅罪の異を述ぶるなり（也）。」

○「遇善知識」等とは、問〔ふ〕。善知識、何ぞ直ちに念佛を説かずして大乘を讃ずるや。答〔ふ〕。異議多端なり。且く『澤見』の一意を挙げば、^{（7）}「是れ極重惡人無他方便の意を顯はさんが爲めなり。謂く、下三品の中に於ては、此〔の〕品の人、罪尤も軽く、命較延びたり。故に先づ（五六左）經題を説く。然れども早已に餘行に堪へざるを見て、轉じて念佛を教ふ。是れ念佛のみ獨り此〔の〕罪人を救ふことを顯はす。」

「十二部經」とは、契經、應頌、記別、諷誦、自説、因縁、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論議なり。又、用欽云〔く〕、十二部とは通じて大乘經を云ふ。『南無妙法蓮華經』、或〔い〕は『大方廣佛華嚴經』等の題號なり。記主評して云〔く〕、「導師の意は契經等十二部の説に順ず。其〔の〕所以は、私段に引ける疏文に十二と一聲と相對するが故に」と。以上『鈔』四（五二）、『散記』三（十紙）の料簡に據る。然るに冢師（『釋鈔』四十七（十三））は、先づ初義は一經十二部、次の義は多經十二部とするの古説を挙げ畢〔り〕て、次に『九品義』の意に依り、能詮・所詮に約して反覆丁寧に二説を會合せり。謂つべし、深切なりと。而して其〔の〕歸する所は、用欽の説に同じ。之に由

罪の違いを述べているのである^{（10）}と云う。

○「遇善知識」について。【問】質問する。善知識はどうしてすぐに念仏を説かないで大乘を讃歎するのか。【答】答える。諸説あるが、まずは『選択決疑鈔見聞』の一つの解釈を挙げると、「これは《極重の惡人には、他に手立てがない》^{（11）}という趣意を表すためである。つまり、下品の上・中・下生の中では、この下品上生の人は、罪が最も軽く、命は、それほど切迫していない。したがってまず經題を説く。しかしながら、もはや念仏以外の行に堪えられないことを見、一転して（經題を説くことから）念仏を教えることにしたのである。これは念仏のみがこの罪人を救うことを明らかにするものである。」^{（12）}

「十二部經」とは、契經、應頌、記別、諷誦、自説、因縁、譬喩、本事、本生、方廣、希法、論議である。又、用欽は、^{（13）}「十二部とは大乘の經典全体を包括して云う。『妙法蓮華經』或いは『大方廣佛華嚴經』などの題号のことである」と云っている。良忠はこれを評して、「善導の考えは契經等十二部の説に従っている。その理由は、私釈段に引いている『觀經疏』の文に十二部と一聲とを對比しているからである。」と云う。以上『決疑鈔』四卷五二丁、^{（14）}『觀經疏伝通記（散善義）』三卷十紙^{（15）}の考察による。然るに聖岡（『觀經伝通記釋鈔』四七卷十三丁）^{（16）}は、先づ最初には一經十二部の解釈、次に多經十二部とする古来の「二つの」解釈を挙げてから、次に良源の『九品往生義』^{（17）}の考えに依って、説き明かす主体（能詮）と説き明かされる内容（所詮）という観点から繰り返し丁寧^{（18）}に二説を會通している。懇切であると言えよう。その結論は、用欽の説に同じである。これによって、^{（18）}「觀徹」『觀無量壽經合讚』には、そのまま用欽の説を用いている。

〔り〕て、『合讚』には、直に用欽の説を用ひたり。

今云〔く〕、後學憚りありと雖も、今の經意は用欽の説に依るを適當とす。其〔の〕所以は、今や命須臾に迫る者に對して、何ぞ所詮十二部の深義を談ずべけんや。唯是れ『妙法蓮華經』等大乘經首題の名字、若〔し〕は一、若〔し〕は二三等を讚するなり。但し『疏』に十二と一聲を相對せるに至〔り〕ては、聞經十二の言、何ぞ必〔ず〕しも契經等十二ならんや。『疏』の意は、畢竟滅罪の多少を論ずるにあり。十二と一聲との數に於ては敢て要とする所にあらず。且つ『散記』には、契經等十二は靈芝の説とすれども、彼〔の〕疏を案ずるに、其〔の〕契經等十二の釋は今の經文を解するにあらず。次の觀音說法の釋なり。彼に在〔り〕ては最も然るべしと雖も、何ぞ今の經文に預からんや。次に阿師は用欽を偏に多經十二部とするの古説を許して、別に自家の會合をなせり。是亦、用欽師の意外なるべし。用欽は阿師自ら依る所の九品の後義に同じ。九品義は全く用欽の説を敷衍せしに過ぎず。故に今の經意は用欽の解に依るを適當とす。

○「如是諸經」とは、即〔ち〕十二部經なり。但し、前二説に隨〔ひ〕て其〔の〕義、異なること知るべし。

○「合掌叉手」とは、十指頭相ひ叉^{まじ}へ、皆右指を以て左指

筆者の考えを言うと「後學の身にあつて遠慮すべきではあるが、この經文の趣旨は用欽の説に依るのが適當である。その理由は、今にも命が尽きようとしている者に対して、どうして十二部に説かれる奥深い義理を説くことができようか。ただこれは『妙法蓮華經』等的大乘經の題名を、あるいは一つ、あるいは二・三等、讚歎するのである。但し『觀經疏』に十二部と一聲を對比していることについては、「聞經十二」¹⁹の語が、どうして必ずしも契經等の十二を指すものであるうか。『觀經疏』の趣旨は、結局、滅罪の多少を論じることにある。十二と一聲との數については特に重要なことではない。しかも『觀經疏伝通記(散善義)』²⁰には、契經等十二は靈芝の説としているが、『觀經義疏』²¹を調べてみると、契經等の十二であるという解釈は、この下品上生の經文を解釈しているのではなく、次の下品中生の觀音菩薩の說法の解釈である。下品中生の解釈としては最も適切であるが、どうしてこの下品上生の經文に係りようか。次に聖阿は用欽の説を、ただ多經十二部とするという古説を認めて、別に自説による會通をしている。これもまた、用欽の趣旨とは異なると言えよう。用欽の解釈は聖阿が自ら依った『九品往生義』による第二の解釈と同じである。『九品往生義』の解釈は全く用欽の説を敷衍したに過ぎない。したがって、この經の意図するところは用欽の解釈に依ることを適當とする。

○「如是諸經」とは、即ち十二部經である。但し、前に述べた二説にしたがつて、その意味に違いがあることを理解しておくべきである。

○「合掌叉手」とは、十指の先を互いに交叉し、すべて右指が左指の上になるよ

の上に加へ、掌を合するを叉手合掌と云ふ。金剛合掌の如くするなり。亦歸命合掌と云ふ。十二合掌中の第七なり（『大日經疏』十三の意）。

◎三に化佛の來迎を明す。（五七左）

【本文】爾時彼佛即遣化佛化觀世音化大勢至至行者前讚言。善男子、汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝。『化觀世音』等とは、下三品來迎の佛は化身なり。然るに化佛は必ず比丘僧を以て眷屬と爲す。故に觀勢二大士聲聞の身形を現して來迎化佛の眷屬と爲る。

○「善男子」とは、本と是れ惡人なれども、臨終に廻心念佛するが故に善男子と云ふ。

◎後に疏文。

【本文】同經疏云。所聞化讚、但述稱佛之功我來迎。汝不論聞經之事。然望佛願意者、唯勸正念稱名。往生義疾不離雜散之業。如此經及諸部中處處廣歎勸令稱名將爲要益也。應知。【講義】「疏」は『散善義』（三八右）。

○「然望佛願」等とは、『散記』三（十一）（に）云く、「釋迦、佛讚を擧げ、機を勸（め）て名を稱せし（令）む。故に、「唯勸」と云（ふ）。夫れ名號を以て本願と爲すは（者）、『選擇集』に云く、『勝劣・難易の二義有るが故に念佛を以て本願と爲す。』」。

○「雜散之業」とは、「雜」は雜行、「散」は行者の心、散

うに、掌を合わせることを叉手合掌と云う。金剛合掌のようにする。また歸命合掌とも云う。十二合掌中の第七であり（『大日經疏』十三卷の趣意）。

◎經文の第三は、化仏の來迎を説明する。

行者前讚言。善男子、汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝。『化觀世音』について。下品の上中下三生の來迎の仏は化身である。さて化仏は必ず比丘僧を眷屬とするので、觀音勢至の二大菩薩は聲聞の姿形を現して來迎の化仏の眷屬となる。

○「善男子」とは本来は惡人であるが、臨終に廻心して念佛するから善男子と云う。

◎『觀無量壽經』の文の後は『觀經疏』の文。

【本文】觀經疏云。所聞化讚、但述稱佛之功我來迎。汝不論聞經之事。然望佛願意者、唯勸正念稱名。往生義疾不離雜散之業。如此經及諸部中處處廣歎勸令稱名將爲要益也。應知。【講義】「疏」は『善導』『觀經疏散善義』三八丁右。

○「然望仏願」について、「良忠」『觀經疏伝通記（散善義）』三卷十一丁に、「釈尊は、仏の讚歎を擧げて人々に名を称えるように勧めている。従つて「唯勸」と云う。そもそも名号を本願とすることについては、『選擇集』に、『勝劣・難易の二つの意義があるので、念仏を本願とされたのである。』と云う。」とある。

○「雜散之業」について、「雜」は雜行、「散」は行者の心が散乱することを云う。

乱するを云（ふ）。故に、『散記』三（十二）〔に〕云く、
「聞經は是れ雜行、亦た是れ心散の業なり。故に雜散之業と云ふ。」

○「此經及諸部」とは、『散記』三（十二）〔に〕二義あり。
一に云く、『如此』とは（者）、三經を指す（也）。『及諸部』とは（者）、自餘の諸經を指す。（『般舟三昧經』『十往生經』等）二に云く、『此經』とは（者）、『觀經』なり（也）。『及諸部等』とは（者）、『壽經』等（『彌陀經』）を指す。此〔の〕二義を案ずるに、初義ならば、「此の如きの經及び諸部の中」と訓じ、後義は「此の經及び諸部の中の如き」と訓ずべし。

◎後に私釋

【本文】私云、聞經之善非^ニ是本願^ニ雜業^ナ。故化佛不^レ讚^セ。念佛之行是本願正業^ナ。故化佛讚歎^ス。加之聞經與念佛、滅罪^ノ（五八左）多少不^レ同^カ也。觀經疏云、問曰。何故聞經十二部但除罪千劫、稱佛一聲即除罪五百萬劫^{ナルハ}者何意也。答曰、造罪之人、障^リ重加以^ニ死苦來逼^ス。善人雖^モ說^ク多經^ヲ、浪受^ル之心浮散^ス。由^ル心散^{スルニ}、故除^レ罪^{コトヲ}稍輕^{ヤシ}。又佛名是^ハ一^{ナリ}。即能攝^{クシテ}散^{テシム}以住^レ心^ヲ。復教令^{テシム}正念稱^ニ名^ヲ。由^ル心重^{キニ}、故即能除^レ罪多劫^{ナリ}也。

【講義】「是本願正業故化佛讚歎」とは、是れ亦下上一品の中に於て願非願を分別して讚不讚を論ず。總じて一切を言ふには非ず。篇目の下に辨ずる（五九右）如し。

○「五百萬劫」とは、經文には「五十億劫」と云ひ、此に

故に、『觀經疏伝通記（散善義）』三卷十二丁に「聞經は雜行である。また心が散乱する業である。したがって雜散の業と云う。」とある。

○「此經及諸部」について、『觀經疏伝通記（散善義）』三卷十二丁に二つの解釈を挙げる。一つは、『如此（經）』とは、三部經を指す。『及諸部』とは、その他の諸經を指す『般舟三昧經』『十往生經』等である。もう一つの解釈は、『此經』とは『觀無量壽經』である。『及諸部等』とは、『無量壽經』（『阿彌陀經』）等を指す。である。この二つの解釈を考察すると、最初の解釈ならば、「此の如きの經及び諸部の中」と訓じ、後の解釈ならば「此の經及び諸部の中の如き」と訓じなければならない。

◎次に宗祖の私見（私釈）

「是本願正業故化仏讚歎」についていうと、これもまた下品上生の中において、阿彌陀仏の本願であるか本願でないかを區別して、讚歎するか讚歎しないかを論じている。広く一切の往生する人について言うのではない。篇目のすぐ後に論じたとおりである。

○「五百万劫」について、『觀無量壽經』の文には「五十億劫」と云い、『觀經

「五百萬劫」と云ふは相違に似たれども然らず。凡そ億に四位の別あり。十萬、百萬、千萬、萬々なり（『望西』五十九）。經文は十萬を億として五十億劫と云（ふ）。故に實には五百萬劫なり。

○「答曰造罪之人」等とは、凡そ佛名を讃ずるに三義あり。一には心の散と攝の異、二には聞と稱との異、三には願非願の異なり。私釋所引の『疏』には前二義を擧げ、引文の『疏』には第三義を明す。故に、合集せば三義となる。其の「中、今は初〔め〕に心の散と攝とに約す。」「浪受」とは領納の義、即〔ち〕聞き込むと云ふ意なり。

○「復教令正念」以下は、次に聞と稱との異に約す。

（以上第十章を料簡し了る。）

- (1) 良忠『選訳伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇一頁上）
- (2) 聖阿『觀經疏伝通記糅鈔』（『浄全』第三卷一〇一八頁）
- (3) 道光『選訳集大綱抄』（『浄全』第八卷五四頁上）
- (4) 未詳
- (5) 持阿『選訳決疑鈔見聞』（『浄全』第七卷八六九頁下）
- (6) 聖阿『釈浄土二藏義』（『浄全』第十二卷三二四頁上）
- (7) 善導『般舟讚』（『浄全』第四卷五四五頁上）
- (8) 懷感『釈浄土群疑論』（『浄全』第六卷八八頁下）
- (9) 『觀無量寿經』（『浄全』第一卷四九頁）

疏』では「五百万劫」と云うことは相違しているように見えるがそうではない。およそ「億」は、四種類の位の別がある。十萬、百萬、千萬、万万（一億）である（『望西』³⁰五卷十九丁）。經文は十萬を億として五十億劫と云う。したがって實際には五百万劫である。

○「答曰造罪之人」について、そもそも仏名を讃歎することについて三つの解釈がある。その第一は心が散乱するか集中するかの違い、第二は聞くことと称えることの違い、第三は本願であるか本願でないかの違いである。私釈段に引用される『觀經疏』には前の二つの解釈を挙げ、前に引用する『觀經疏』では三つめの解釈を挙げている。従って、合せると三つの解釈となる。その中、ここは初めに心が散乱することと集中することの違いについて解釈している。「浪受」とは領納の意味、つまり「聞き込む」と云う意味である。

○「復教令正念」以下は、第二の聞くことと称えることの違いについて解釈している。

（以上第十章を考察し終えた。）

- (10) 聖阿『釈浄土二藏義』（『浄全』第一二卷三二七頁下）
- (11) 「極重惡人無他方便唯弥陀得生極樂」は『往生要集』の中で「觀經曰」と『觀無量寿經』の説として挙げられている表現である（『浄全』第十五卷一二九頁上）。
- (12) 持阿『選訳決疑鈔見聞』（『浄全』第七卷八七〇頁上）
- (13) 用欽『白蓮記』（欠）か？（良忠『選訳伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇三頁下）及び、阿川正貫「諸師著作中に見る用欽の遺文」『佛教文化研究』第三十七号九六頁参照）
- (14) 良忠『選訳伝弘決疑鈔』（『浄全』第七卷三〇三頁下）

- (15) 良忠『観経疏伝通記(散善義)』三(十紙)、『浄全』第二卷四二二頁上)
- (16) 聖問『観経伝通記糅鈔』(『浄全』第三卷一〇一六頁上)
- (17) 良源『九品往生義』(『浄全』第十五卷二四頁下)
- (18) 観徹『観無量寿経合讃』(『佛教大系(浄土三部経第五)』一四七頁)
- (19) 善導『観経疏(散善義)』(『浄全』第二卷六七頁下)
- (20) 元照(がんじょう)(一〇四八―一一一六)大智律師。南山律宗第十六祖。著書に『四分律行持鈔資持記』四二卷、『観無量寿仏経義疏』三卷、『阿弥陀経疏』一卷、『直生浄土礼懺行法』、『十疑論科』、『芝園集』などがある。九品往生人はすべて凡夫であるという善導の立場を取り、称名は多善根であり、布施持戒立寺造像などは少善根の業であるとして称名を勧めた。(『浄土宗大辞典』第一卷二四四頁上参照)
- (21) 元照『観経義疏』(『浄全』第五卷四二二頁下)
- (22) 「十二合掌」(1) 堅実心合掌(2) 虚心合掌(3) 如未開蓮合掌(4) 初割蓮合掌(5) 顕露合掌(6) 持水合掌(7) 帰命合掌(8) 反叉合掌(9) 反背互相着合掌(10) 横柱指合掌(11) 覆手向

- 下合掌(12) 覆手合掌(石田瑞磨『例文仏教語大辞典』五一〇頁中参照)
- (23) 善無畏講説、一行筆録『大毘盧遮那成仏経疏』(『大正蔵』第三九卷一七一四頁下)
- (24) 良忠『選択伝弘決疑鈔』(『浄全』第七卷二四七頁下)
- (25) 「如此」の訓点「二レ」は意図的に付されたものである。以下の講義参照。
- (26) 『浄全』第二卷六八頁上
- (27) 良忠『観経疏伝通記(散善義)』(『浄全』第二卷四二二頁下)
- (28) 『観経疏伝通記(散善義)』の文には「如此経」とあるが、『講義』は「経」の字が脱している。
- (29) 良忠『観経疏伝通記(散善義)』(『浄全』第二卷四二三頁上)
- (30) 了慧『大経抄』(『浄全』第一四卷一三九頁上)

うえの ただあき(嘱託研究員、浄願寺副住職)